

series Salamander in the circle

リ・コンストラクション

第二部

第十三章

Heartbreak

峯村 明

リ・コンストラクション

[登場人物](#)

[13・Heartbreak](#)

[157.](#)

[158.](#)

[159.](#)

[160.](#)

[161.](#)

[162.](#)

[163.](#)

[あとがき](#)

[奥付](#)

登場人物

桧山 健	21歳の大学生
間宮 ひろ	日本の高校生
間宮宮司	ひろの父
河合 ヤスオ	ひろの同級生

13・Heartbreak

157.

桧山が何本か電話をかけている間に、ひろは父親と長いこと話していた。用件がひととおり片ついて、間宮夫人が淹れたてのコーヒーを運んでくれた時もまだ、父と娘は話していた。なにかもめている、という感じだった。夫人も父娘が気になる様子で、桧山の相手をしていてもどことなくうわのそらだ。やがて宮司の部屋の障子が開いてひろが出てきたが、面を伏せたまま奥へ行ってしまった夫人はちょっとため息をついて立ち上がり、となりの部屋から桧山の上着をもってきた。お返ししますわね、と言って。ほこりを避けて、前日からしまっておいてくれたのだった。間宮家に一泊することは考えてなかったがシャツとタイのスペアは持参していた。濃紺のスーツに、前の日はストライプ織りの白いシャツと淡いパープルのソリッドタイを合わせていたが、今日は白シャツ、タイはダークグレーの地に白いピンドットの入ったものに変えた。一日ぶりに上着を着込む。そろそろ帰る時がきた。

ひろが奥から戻ってきた。襟つきの、改まった印象のある白いワンピース姿。日焼けした肌によく映えている。髪は編みこんでアップにしている、つい先日まで陸上選手として大胆なセパレーツのユニフォームでトラックを走っていたとは思えない清楚さだ。両親の意見を受け入れた彼女に、この姿で見送られるならそれでもいい、と彼は思った。わずかのあいだに泣きはらした証に、ひろは目を真っ赤にしていた。白いハンカチをきつく握り締めて視線を落とし、桧山を見ようとしなかった。こちらへ、と間宮宮司に呼ばれる。これから仕事なのか、神官の装束をきっちりと着込んでいる。

*

間宮家の奥座敷にすすめられるまま正座した。少し離れてとなりにひろ、あとから間宮夫人もやってきて同席する。

少々窮屈だが、すぐ済むから、と前置きし、宮司は口を切った。

「娘と話した」と普段使いの口調で始めた。

「ひろも気持ちに変わりはない、と言っている。きみの求婚を受けたいと。私も、ひろの母親も、娘の気持ちを尊重したいと思う」

楡山は神妙に聞いていたが、思わず顔をあげて宮司をみた。

「きみたちの結婚、私らは認めた、ということだ」

とっさに言葉がでなくて、彼はとなりのひろをみた。それでひろは泣いていたのか？

「——でも！」真っ赤にした目にまた涙をためてひろは訴えるようにいった。「——お父さん！！」

「おまえはちょっと黙ってなさい」と宮司は言う。

「しかし娘はまだ高校生、私らとしては高校を卒業してほしいのだ」

楡山はうなずく。昨晚ふたりでその話をしたところだ。

「卒業まであと半年、きみはこれからくにへ帰るのだろうし、その間、離れ離れとなるわけだ。しかし半年の間になにが起こるともわからん。娘の陸上熱が再燃するかもしれんし、きみが浮気しないともかぎらん」

「お父さんてば——！！」娘が体中で抗議するのを無視して父は続ける。

「正式な婚姻が成立するまではその手のリスクは常にあるわけだから、こういう場合、世間では結納を取り交わすということをする。が」

と、宮司は少し間を置いた。

「金銭が絡むことはきみたちには抵抗があろう。そこで私は娘に提案したのだが……かえって抵抗にあってしまってね」

「はあ……」

「健君、きみはどうだろうか。今日、ここで、祝言を挙げる、ということなのだが」

「なに、祝言といっても簡単な、仮のものだ。無形でかまわんから神さまの前で約束してもらってだね、間宮家を安心させてほしいと、ひらたくいえば、そんなところだ」と宮司は言った。

ひろの結婚と海外への移住、その二点の承諾を得たいがための間宮家訪問だった。

挙式など遠い先のことでオレはプランすら持っていなかったし、婚約指輪のことを考えないでもなかったが——オレの年間収入を月収に換算して三倍すると——高校生には精神的負担が大きいだらうと思い、用意すること自体やめてしまった。

オレとしては承諾さえもらえればよかった。しかし間宮家の人々にしてみればそうはいかないのだ。

納得のいくかたちで約束を表してほしいということだ。当事者のひろは、自分自身心の準備ができていないし、オレもそんなことまで考えていないはずだ、と抵抗したのだが、考えられる限りの準備はしておくのが大人というものだという宮司の意見は耳に痛い、オレは賛成だ。

数ヶ月前に顧問弁護士から未熟者の烙印を押され、自尊心をぼろぼろにされてからオレは他人の意見は素直に聞くことにしていた。

すねていても始まらないし、そんな時間もない。五年後にはH&L財団の代表者に会いに行くと決めたのだ。

儀式は宮司の言葉通り、きわめて簡単にあっけなく終わったが、あとでひろから聞いたところによると、斎場は早朝から清められていて宮司から仮祝言の話があった時には準備はすべて整っていたのだという。

式場をなんとか目にしているひろから聞かなければわからなかったことなのだが、簡単に仮だったのは儀式だけだったのだ。

「あなたに断られたらどうしようか、ひやひやものだった、って言ってたわ」

あの宮司、いやお義父さんが……？

「あなたが受けてくれたおかげで、うちのお父さんの職業上の面目と、親の立場と、私自身の安心と。いくつものことが解決したってことなのよ。ぜんぶ間宮家側の問題で申し訳ないんだけど

ね、だから、あなたの側の立場や事情を考えて、できるだけあなたの負担にならないようにするから、って……」

そうだったのか……

宮司は最後に言った。

「約束は相整った。今後はきみたちがきみたちの自覚と責任によって生きていくのだ。『おのれの魂の聲に忠実に』、な」

*

ふたりを送り出したあと、宮司はひとり齋場に戻って物思いにふけた。

一年前の、今日だった。

ふたりが結婚の約束を交わした齋場のその場所に、黒髪の美少女がいた。彼女は湖の主だった。彼女は言った。「あのふたりがいっしょならば、私のすべきことは終わった」と。

彼女はふたりが結ばれることを望んでいた。

そのことは宮司しか知らない。誰にも話してはいない。

あれからすぐに渡豪してしまった桧山 健が娘ひろに結婚を申し込んできたとき、あの不思議な夜のことが思い出されて、宮司は思わずも戦慄し、その後幾度となく彼は鳥肌をたてた。

「走るために生まれてきたような」とひろを評したのは、なにも河合が最初ではない。宮司は娘の幼少期からその評を耳にしてきた。

しかしひろは、魔物の干渉を退け、その情熱を燃やし尽くして桧山 健を選んだのだ。そして仮祝言の今日は、奇しくもあれから一年目の日だった。

彼女がふたりの婚姻の先になにを見ていたのか、間宮宮司は知っている。それは異なる次元からの息吹だ。

「来たな！」、と彼は笑った。

八月も後半の八島は、はや秋の気配が忍び寄っている。春の初めの彼岸の、あの日から五カ月、その間に萌える夏が過ぎ去っていた。

「あの日、私はそなたらに言った。婚礼をあげてから出直して来なされ、とな。ふむ、どうしてそのことが記憶に残っていないのかと？ そなたら、どちらも時が来ていなかった。準備ができていたのはヴァリスどのだけだった。そなたらはおまけみたいなものだったわけだ。どうだ、振り返ればなるほどと思うだろう。どちらも、越えるべき試練、越えるべき山があったのだ」

そう言って彼は丘の向こうを指さした。そして、ついて来いという。丘の頂上からなだらかに斜面が広がり、八月の強い陽射しに草いきれが立ちのぼっている。

「このふもとに、そなたらの墓がある。マミヤ、レル・ヴァリス、ダーヴェ、そしてヒューダー。四名が同じ墓に眠っている。今は湿原の下に沈んでしまっているが。そなたらは強い絆で結ばれている。出会えばすぐにそれとわかる絆だ。そなたらは出会うべくして、この世にいる」

「スクナどの」、桧山は自分の口調の重々しさを感じる。「なにがあったのだ。我々はなぜ……同じ墓に……」

「ヒューダーよ、さっきも言った。思い出せぬには、それなりに訳があるものだ。たとえば大変つらい記憶。

だから……無理に追及せぬがいい。しかしこれは明かしても構わんだろう。あれからあの世界が、酷寒の時代を経験したということ。

惑星は凍りつき、多くの生き物が死に絶え、もはや滅亡は避けられぬと思われるほどの極酷寒の時代があった。その引き金となったのが、結局、そなたらの死だ」

「そなたらに落ち度があったという意味ではない。そなたらを失ったことが、彼には耐えられなかったのだ」

「スクナさま——『彼』、って——」

「——彼の本質である火と熱が、負の方向に爆発的に働いた。極低温の方向へ。『彼』とはすなわち火の精霊である。その嘆きはもはや人の手に負えるものではなかった。深刻な凍結状態を元に戻さんと、地上の元素霊全員に召集がかかった。たとえばホシナ族、たとえばシトリ族」

「ホシナ族が元素霊？ 本当ですか！？ それからシトリ族って？」

「ホシナ族は土の元素霊だ。彼らは黒曜石を通して人間と元素界とを結びつけた。シトリ族は風の元素霊だが、そうか、シトリ族のアマセオとつきあいがあったのは……ヴァリスどのだったか、その辺の詳細はいずれヴァリスどのから聞かれるがよい。そして水の元素霊。ヒューダー、そなたは彼女から『キリガミネ探訪』を手渡されたはず」

「え——あの本は西ノ宮の家で——」

「あの人々は竜神の一族である」

「竜神！ そういえば誰かが、彼女は『湖の主』だと——」

「湖の主、竜神、水の元素霊、みな同じものだよ。」

元素霊たちの献身的な働きによって惑星は酷寒の時代から復活した。しかし、あの特殊な火の精霊はいまだ復活に到らぬ。『彼』は神々によって封じられたゆえに、復活にはいくつもの条件を満たさねばならぬ。そのひとつが、そなたらの婚姻」

「——どういう意味——」

「婚姻とは、物質界にも精神界にも膨大なエネルギーを生み出す。『彼』の場合、特に。マミヤ、それゆえそなたの存在理由は転換されねばならない」

「————」

「ま、そういうことだ」

スクナは、しれっとその話を切り上げた。そして別の話を持ち出す。

「ヒューダーよ、そなたはさまざまな理由からかつてのそなたと異なっている。外見然り、能力然り。外見はマミヤに合せたものだし、能力は今後のそなたの仕事によるものだ」

「今後の、オレの仕事というと……」

「率直なところ、この時代ほど、人間が数字に縛られている時代はない。数字とはすなわち金銭、あるいは相対的な評価であったりする。

人間はもはやそれらの数字の奴隷。数字がなければなにも始まらぬ。この時代に生まれたそなたにはぴんと来ないかもしれぬが、物質の肉体を保持するのに必要な衣食住はもとより、学ぶこと働くこと遊ぶこと、生きることのあらゆる面が、数字に縛られる。人は、それは常識だ、当たり前だというだろう。だがな、断言できる。こんな時代はかつてなかった。人間はもっと自由だった。そなたらはおそらく不自由な時代を生きている。そのうえ、そのことを知らない」

「なぜ……」「誰かが世界を変えてしまった？」

「そうだ、ヒューダー、その通りだ。人間はそいつの奴隷なのだが、そのことを知らない。それどころはそれが当たり前だといい、異を唱えようものなら世間知らずと嗤う始末だ。この世界が何者かに支配されていることに気がついたのは、そなたの曾祖父、桧山正太郎氏だ」

「数字によって——支配——」

「さよう。数字によって人間は自由を、魂が生きる自由を奪われた。奪った者がいる。《そいつ》は社会全体が共有する常識を盾にしている。つまりそいつと戦うことは常識に盾突くことであり、社会全般を敵にまわすことになりかねぬ。

H&Lは表向きは人間の自由を取り戻すために、根底に《そいつ》に対抗する目的をもって、組織された。

ヒューダーよ、セオデリック・ウィリアムスが桧山 健に対して手厳しいのは、そのような危険な戦場に送り出さねばならないとわかっているからだ。

しかし、組織の人々と顔を合わせれば、かつて知っていた人々だったとそなたは知るだろう。それはマミヤと出会い、ヴァリスどのと出会った時の感覚だ。そなたを待っているのは未知の世界であると同時に、再会の時なのだ。そなたが抱いている不安も恐れも、当然のもの。だが怖れることはない。この道の向こうで、そなたがよく知っている者たちが、そなたの到着を、いまや遅しと、待っているのだぞ——

ダーヴェによって『キリガミネ探訪』が書かれて百年余、多くの者たちがここを訪れ、私らは語りあった。なかにはそなたらの知らぬ者もいる。しかしどこかで糸が繋がっている。

今この邂逅は現実世界に戻ればおおかた忘れてしまう。現実世界ではそなたらがマミヤであったこと、ヒューダーであったことはまったく不要なことだから。だが潜在意識はすべて承知している。だから、迷いや疑問は己の魂に問うがいい。答えはすべてそこにある。私とともに、な」

160.

学校帰りに河合と同じ電車になった。たまにはゆっくり話そうぜ、という誘いに乗って、ひろは湖岸公園へやってきた。

「おめえさあ、どうだった？ こないだの考査」

「あたし？ あたしはまあまあ。そこそこよ」

河合の浮かない顔を見れば、彼の成績がもうひとつだったことは聞かなくてもわかった。

「ふーん……」

髪の毛に指を突っ込んでばりばりと掻いている。以前のひろなら、風上でそういうことしないでよ、と遠慮容赦なく文句をいっていたものだが。

今は他人の傍若無人の振る舞いも微笑みながらみていられる。自分の中で人に対する許容範囲がぐっと広がり、余裕が出てきたような気がするのだった。

河合はそんなひろがますますまぶしくて仕方がない。

二学期になってからなんとかひろと話がしたいと思っていたのだが、ひろたち三年生部員は部活を引退してしまったし、河合は残務整理やら後輩マネージャーへの引継ぎやらで相変わらばたばたしていたのだった。

それがようやく落ち着いたころにははや、進路を詰める時期にきていた。

「いいよなあ、おめえは」

「……なにが？」

「なにがってこれからのことさ。進学して陸上やって……いいよなあ、高校の部活なんか、目じゃねえよな、試合なんか日本中股にかけるんだぜー。おれも行ってえよ……」

「河合くんなら大学行っても大丈夫よ。マネージャーとしての手腕はあたしが、ううん、部員みんなが保証するわ！」

河合は嬉しいようなこまったような笑い方をしながら言った。

「おおありがとーよ。だがよ、マネージャーは選手と違って公式記録とか実績が残るわけじゃねえんだ。推薦入学なんか、ねえ。ほんとにこれから実力勝負さ」

「あ……そうね……」他人の進路のことで迂闊なこと言わないように、気をつけなくちゃ、とひろはこっそり決心する。

「……とはいうものの！ おれはおめえの行くところならどこでもついてくぜ！ おめえのマネジメントはおれがやる！」

ひろは思わず、えっと耳を疑った。耳を疑いつつ、聞こえなかったふりをした。

「おれさ……前にも言ったよな、インターハイ終わって夏がすぎたら……って」

ひろはそろそろと河合を振り返った。河合は目をそらしてあらぬ方を見ていたが、顔つきは真剣そのものだった。

「インターハイ終わって夏がすぎて、改めてよくよく考えてみたが……おれ……これからもおめえといっしょに、やっていきてえ、って思うんだ……」

河合くん……と言おうとしたが、舌が上あごにはりついてしまって声が出ない。ふたりの傍らでコスモスが揺れている。

161.

……については、進学先をこっそり教えてくれ、というのが河合の言い分だったのだ。彼は真剣だった。

誰にも、口外しない、おれは自力でがんばっておめえと同じ大学へいくんだ、と。

「おれな、おめえが頂点をきわめるところを、そばで見てえ！」

「——頂点をきわめる？」

「オリンピックさ！ アスリートの頂点ったら、それしかねえだろ！」

彼のあまりの真剣さにひろは思わず唾を飲みこみ、のどがごくつと鳴った。「——河合くん——」
眉間にしわを刻み、いやいやをするように首をふるひろを、
「おれにならできる！ おれになら、おめえをそこまでつれて行ってやれる！ 行こうぜ！ いっしょに！」

苛めているような、倒錯した感覚を河合は覚えた。

ひろは気を落ち着けようと、大きく息を吸い、吐いた。深呼吸につれて上下する冬制服の胸部に、河合の目は貼りついてしまった。その胸がいきなりぐると河合に向き直って、彼は思わず後ずさりした。

もう一度大きく息を吸い込んで、ひろは、はっきり言った。「河合くん。ごめんね」

「い？ いいいいいやいやいや！ いや！ おめえの胸ならおれはぜんぜんかまいませんっ！！」

「え？ あのね、河合くん、あたしね、進学しないのよ」

「——へ？」

「進学、しない、あたし」

「え……え……ってことは、どっかの企業チームへ……??」

「それも、ないわ」ひろは、ひと言ひと言はっきりと区切って言った。

「……進学も就職もしねえ??? えーと……あっ！！ そうかっ！！ その手があったかー！！」

「なによ？」

「家業継ぐんだ！ 巫女さんになるんだろ？」

思わずがっくりうなだれて、ひろは、ちがうわ～、とうなった。

「あたし、陸上はもうやらないのよ。河合くん！」ひろは河合の肩にがしっと片手を置いた。

*

河合の耳元を秋風が吹いている。木枯しのように乾いた冷たい音が耳元で鳴っている、ような気がする。

進学も就職もない——？

陸上はもうやらない——？

高校総体の大会記録をふたつも更新したやつが——？

なんで——？

「なんでだよ、え？ なにがあったんだよ？ ひろ、おめえの身になにが起きたんだよ！？ まさか、どっか具合悪いのか！？ 故障か！？ 病気か！？ おれには言えねえことなのかよ！？」

「河合くん……約束してくれる？ まだ、誰にも話さないって」

「やっぱし——なんか事情があるんだな！？ する、約束する。誰にも言わねえ」

「あたし……結婚したのよ」

「………はい？」

「結婚したの」

「………いつ？」

「八月。夏休みに」

「………うちのレオンも春休みに結婚したぜ」

「河合家のとら猫と一緒にしないでくれる？」

「ま……まさか……おめえ……夏休みの間に……誰かと、で、できちまった！？」

「へんなこと言わないでよ！ あたしのお父さんが神官やってるの、知ってるわよね。お父さんが祝詞あげてくれたの。ちゃんと神前で式挙げたのよ」

「………うそだ」

「うそじゃないわよ！ 神さまに誓ったし、うちの両親公認なんだってば！」

うそだ……と、河合はつぶやき、うそじゃないわとひろもつぶやく。押し問答のように。河合はいつの間にか遊歩道の真ん中に座り込んでしまい、ひろはその傍らに立っていた。散策に訪れた人たちはふたりをよけて行く。青春だねえ、とつぶやきながら。

*

「……そいつは……おれの知ってるやつか？」

「知らない……と思うわ」

「……そいつは……いくつ？」

「二十二歳」

「……社会人……？」

「ううん。……学生。大学生よ」

「……そいつ……おめえが陸上やってたの、知らねえのか？」

「知ってるわよ」

「……それで……インターハイ終わったとたん、おめえんちへ押しかけてったってわけ？」

「……………」

「わかんねえ。理解できねえ。なんでそうなるんだ？ おめえも、そいつも、認めたっていうおめえの親も」

「……河合くん……」

「いったい、なに考えてんだ？ 誰もおめえの立場を考えなかったのか？ おめえもおめえだ、け、結婚するたって……陸上やめるこた、ねえんじゃねえの？ それとも、そいつに無理矢理やめさせられたのか？ そうか、そうなんだな？」

「……河合くん！！」

「祝詞あげちまったんだかなんだかしらねえが！！ おれは認めねえ！！ 別れろよ！！ そんなやつとは！！」

河合は激高していきなり立ち上がった。近くを散歩していた小さなテリアがびっくりしてきゃんきゃんと吠えた。

「あたしね……もし両方選べたら、そうしてたわ。でもそれはできなかった。河合くん、あたし自分で、彼を選んだの。陸上も彼も、同じくらい大事だったから」

「お、同じくらいって——！ たかが男だろう！？」

それを聞いてひろは思わず目を吊り上げた。河合もまた負けるもんかと思返してくる。

「今どき、男なんか当てになるかよ！？ それも陸上のりの字も知らねえ、自分で稼いでもいねえ学生なんかだよ！？ どうせ親に食わせてもらってんだろ！？」

「……そ、それ以上言ったら許さないわよ……」

「なんだ、図星かよ？ けど才能や技術は当てになるんだぜ！ そういうのは磨きあげれば、ぜったい持ち主を裏切らねえんだよ！！ おめえくらいの力があればそんなこと言われなくたって、ふつう気づくよ！！ それを——！！ バカじゃねえの——！！」

「……………」

「目え覚ませよ！ おめえは陸上から離れたら生きていけねえ——！」

しゃべるのに夢中だった河合は顔の左側からとんできたパンチをまともにくらって、コスモスの茂みの中に仰向けに倒れた。視界に夕焼けに染まりつつある晴れた空と白いソックスに包まれた脚が映っている。その脚がぐるりと踵を返して消えていった。

163.

コスモスの茂みの中に仰向けに倒れて、そうだったのか、と河合はぼんやり考えていた。

竜神湖の例大祭の前夜、いとこの小学生にせがまれて花火見物に出かけ、見物人の人ごみの中にちょっと好みの少女を見つけた。藍地に撫子が咲いた浴衣、編みこんだ髪のおくれ毛がきりっとしたうなじに遊んでいる後姿に、彼の心はときめいた。

いいなあ——と単純にどきどきした。

(夏の夜の出会いよ、こ～んば～んわ～♪)

インターハイで好成績をあげた高揚感もまだ残っていて、彼はひどくファンタスティックな気分を味わっていた。

七歳のいとこを保護者気分半分、上の空半分で誘導してやりながら、ずっと彼女の後ろの方から目を離さずにいた。彼のなかで彼女はいつの間にか間宮ひろに重なっていた。

彼女が誰といつしか、など気にもならなかった。彼女は彼、河合ヤスオのために振り返り、花火の一瞬のひらめきのなかで彼のために微笑んでくれる天使なのだ——

しかしその微笑む横顔は彼がよく知っている間宮ひろに、いかにも、よく似ていた。

まさか、とふと疑った彼は、いとこに綿菓子をもたせておとなしくさせ、彼女のあとをこっそりつけた。

彼女はひとりではなかった。連れがいた。背の高い男で、彼女の顔のあたりばかり見ていた河合はどうとう、彼女の連れがどんな男か見ないでしまった。彼女たちは花火大会がお開きになる前に、人の間をすり抜けて向こうへ行ってしまった。

ありゃあ、おめえだったのかよ——とぼんやり考える。

夏休み中もその後も、そのことで頭がいっぱいで、ひろと話したかったが、怖くて、怖くて、今日まで話かけることができなかった。陸上部の残務や引継ぎで忙しいふりをして。

男なんか——！

情けねえのは……おれだ……おれなんだよ……

一度堰が切れたとたんに、抑制がきかなくなった。自分がとてもまずいことを口走っている自覚があった。罵詈雑言を吐きちらした。

ひろを怒らしちまった……

でも、どうにも抑えられなかった。

ひろを傷つけようが怒らせようが、吐き出さずにいられなかった。もうこれで終わりだ、終わりにするんだ、と思った。

ひろへの片思いも。

同じ大学へ進学することも。

いっしょにオリンピックのスタジアムに立つことも。

夢よ、さよ—なら——だ

制服のポケットから財布を引っ張り出し、ファスナー付きの“貴重品入れ”をあけて一枚の紙片をそと取り出す。

F.H.J……H&J財団の銘が銀色で箔押しされた名刺を顔面にかざすと、裏に書かれた長い電話番号が陽に透けてみえた。

あとがき

ここまでが第二部です。

第二部は松山一門宮編ですね。

ちょっと前に第二部は十四章までであると言ってしまったのですが、長いシリーズの中にぽんと出てくる陸上競技の話に、全然興味が持てない、退屈、と感じられる読者さまもおられるはず。でも登場人物それぞれの心模様も絡んでる。

うーん。

スポーツものの漫画をあれこれ眺めて研究したあげく…あれこれ削って削って加えて、十三章で終わらせました。話がちゃんとながっているのか不安ではあります…

スクナさまの話は詰め込み過ぎたかもしれない。が、何度読み返してみても、うまく修正できない。いっそ、全部削ろうかとも考えましたが、『オリカルクムの記憶』と繋がる部分でもあり、今後の土台になる部分でもあり。まあ、健とひろが夢のなかで見聞きした不確かな話だという、そういうことで。

およそ百年前に、世界が数字的なものによって支配されるといったのはシュタイナーです。

『それは〇〇〇〇〇である』。

それにしても、第二部が一ヶ月かからなかったのはちょっと想定外でした。急ぐつもりはなかったんですが、執筆作業(走ってる)と電子書籍編集作業(寝かせてあったのを起こす)の時期がずれてくると気分的な温度差が発生するというか混乱するというか、最近は一〜三日の放置でもう熱がさめてしまう。できるだけいっぺんにやってしまいたいわけでした。とにかく、書きたい時に書きたい。編集作業は筆者の意向や好みをなんでも心得て、二十四時間つきあってくれる河合くんみたいなマネージャー兼アシスタントに丸投げしたいと思う今日このごろ。

公開のピッチがけっこう早かったので、読者さまにはしばらくごゆっくりと読んでいただければと思います。しばらくはしばらく。もしかしたらすぐにスタートするかもしれません。

第三部は新展開になります。

2025年4月11日 記

奥付

リ・コンストラクション

第十三章 Heartbreak

2025年 4月15日初版発行

著者

峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材

[NEO HIMEISM](#)

制作

Puboo

発行所

デザインエッグ株式会社